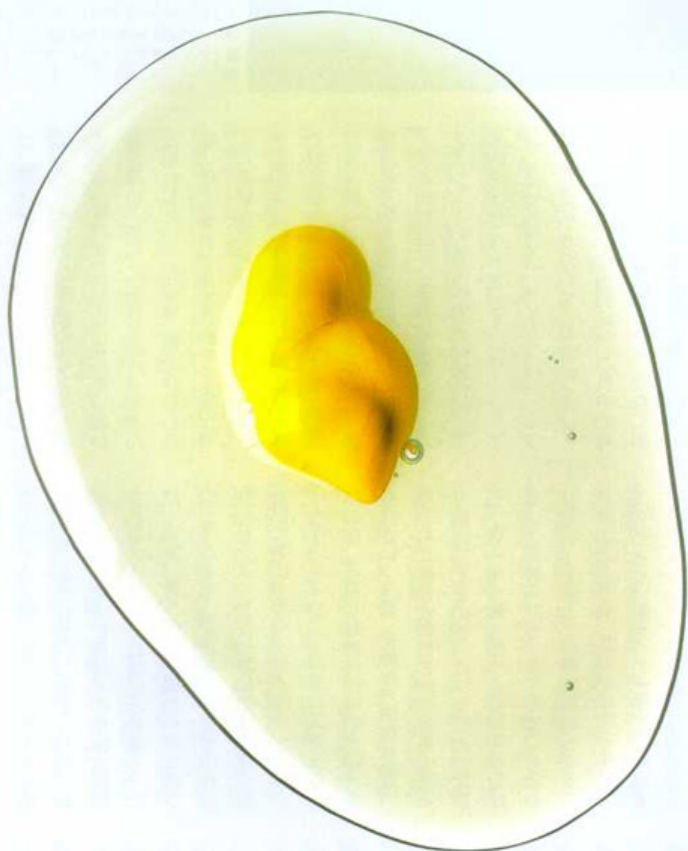


水彩 Technique。

メディウム!



新しいテクニックが新しい作風を生み出す、ということが水彩の世界でも始まっている。絵具自体を自作することで、水彩のタッチを変えたり、色合いに変化をつけたり、にじみを調節したり、マスキングをしたり、白抜きをする。メディウムを使うことで表現が変わっていきます。ホルベインから本格的な水彩用メディウムが出ました。専門店で。

<ホルベイン水彩用メディウム シリーズ> オックスゴール/サイジング リキッド/ウォーターカラーメディウム/アラビアゴム メディウム/アラビアゴム ベースト/イリデッセント メディウム/マスキングインク/マスキング インク クリーナー/水彩画 保護ワニス/UVグロス パーニッシュ/UVマット パーニッシュ

ホルベイン工業株式会社 東京都豊島区東池袋2-18-4 TEL.03(3983)9251 大阪府東大阪市上小阪1-3-20 TEL.06(6723)1554



holbein

www.holbein-works.co.jp

holbein

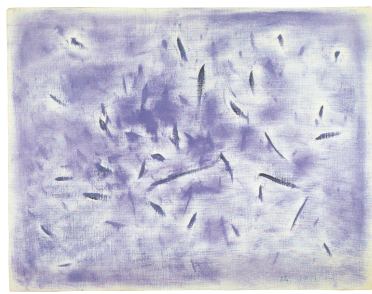
李禹煥

生まれくる 余白の響き

鷹見明彦 文 森田兼次 写真・印



1976年、『線より』とともに、60年代の終わりから70年代前半にかけての変革期に登場した「もの派」の活動もひとつの季節を過ぎて、作家たちはそれぞれの道へ。造形を原理的に批判した「もの派」を超えて、ふたたび絵画、彫刻を再構築するようになった



1964

「子どものころの儒教的な教育では、画は賤技と言われていたので、絵描きになる気はなかったのです」

無題 1964 キャンバスに油彩
31.5×40.5cm

鎌倉宮の裏から山のほうへ上がった尾根道の入り口近く。訪ねたアトリエの作家は、近年ヨーロッパでの活動が広がって、1年の半分以上は、海外暮らしとか。「数日も仕事をしないと、手が強ばって、言うことをきかなくなってしまう。それで大きい筆を握って、力を出す。そうじゃないと、握力がなくなってしまうので」。

「僕の場合、身体性がすごく大事で、身体を外しちゃったら、描く理由はありません。身体を鍛えるとか特別なことはしませんけど、身体との関わりのおかげで、一生懸命ものをつくる、その感覚を大事にしてやってきました」。

庭側の戸口を開け放った木造の広間は、韓国の旧家にいるような趣がある。壁を埋める書棚、窓辺に吊された刷毛や太筆、さりげなく置かれた朝鮮半島の民芸家具や陶器など……。

「僕が生まれ育った慶尚南道の山奥の村は、儒教色の強い所だった。



関係項 1969
ガラス、石、ゴム
「現代美術の動向」展
(京都国立近代美術館)
でのインスタレーション

1969

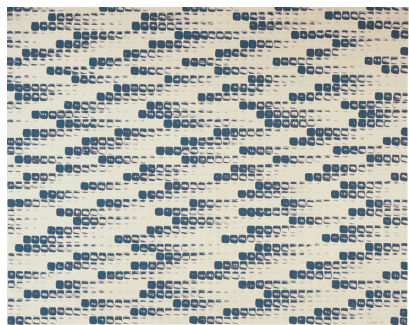
「もの派は、物ではなく、モノとモノとの関係によって、世界のあり方を再提示する運動だった」

子どものころから、文人になるための教育を受けて、画も習わされたが、儒教では、画は、せんぎ「賤技いやしき」なり」とされていたので、それがコンピュータになって、後年まで、絵描きになる気はなかった。

「子どものころは、絵より音楽が好きで、叔父の家にあつた蓄音機でレコードをかけると、中に人もいないのにシンフォニーが鳴って、非常にびつくりして感動した。見えるものより、見えないもの、抽象的なものが人をとらえることの驚き。そうした発想の原点は、いまだに変わらな

いず」。

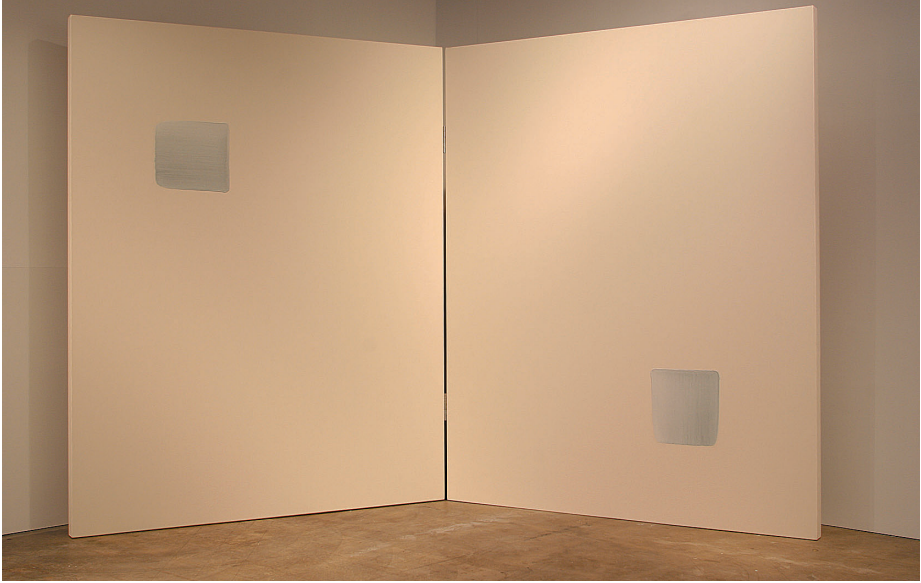
中学生のときに朝鮮戦争を体験。その後、釜山を経て、ソウルで暮らす。ソウル大学の付属高校では、文学に熱中するあまり、志望の文学部には進めず、美術学部へ。1956年、大学の夏休みに横浜に住んでいた叔父を訪ねて、日本へ渡航。「戦争や植民地支配への憤りいきどおよりも、早く進んだ世界へ行って学びたい気持ちのほうが強かった。来てみたら、聞いていたのや想像したのと



点より 1977
キャンバスに膠、
岩絵具
182×227cm
東京国立近代美術
館蔵

はちがう世界があつて、これは、日本語を覚えて勉強するしかないところ……」。

日本大学の哲学科に入って、ハイデガーや丁チエを学んだ。60年代前半、安保闘争のなか、南北の統一運動や反軍事政権闘争、そして文学への挫折などを経て、美術の道に向かう。この間、絵を学び直そうとして、日本画の画塾に行ったりもした。



照応 2005
キャンバスに油彩
227×364cm 個人蔵 *]
横浜美術館での展示より

2005 「点を一つ、ポンとつけると、周りの空気が響きあう場合もあれば、何も起こらない場合もある」

《無題》(1964)は、文人画の手法にアンフォルメル絵画の影響が混ざり合っていた初期作。58年ごろ、大学の先生の弟にアメリカ帰りの人がいて、ポロックやマーク・トビーの作品が載った美術雑誌を見せてもらったのがきっかけになって、新しい作品が出ていそうな展覧会を見て歩くようになった。まだ現代美術が紹介される機会の少ない時代、フォンタナの作品などを見て、奇妙なものがあるなど。

1967年、当時、現代美術系新人の発表の場だったサトウ画廊で、初個展。美術評論家の石子順造さんや関根伸夫さんたちと知り合ったのも、そのころだった。石子さんは、後に中原佑介さんと、トリック・ス&ピジョン展を企画しましたが、もの派の誕生には、高松次郎を元祖に当時流行っていたトリッキーな視覚操作の影響が大きかった。

《関係項》(1969)は、もの派全盛期のインスタレーション。『もの派』というく、石や木などを組み合わせる東洋的なミニマリズムみたいな

誤解が依然あるけれど、ガラスとかオイル、セメント、電球などの工業製品も組み合わせさせて使ったところが、ミソなんです。それは、戦後の消費物質文明の矛盾が、世界的に批判された時代に生まれた運動だった。

『もの派』は、誰かが付けた蔑称(せうしょう)だったけれども、べつに物にこだわらなければ、たわけじゃなくて、つくることより、モノとモノの関係や場に力点を置いて、世界のあり方を再提示する方法だったのです。

《点より》(1977)は、もの派の時期を過ぎて、再び新しい観点から平面に向かった連作の一点。立体とちがって、絵画は、限定されたフレームに孤独に立ち向かう性格が強くある。そこにモノや空間やいろんな状況を表現の場に使うことを、もつと抽象化して、身体を抽象的な動きのなかにとらえる仕事の可能性があるんじゃないかと……。これが、僕が絵画に再び注目した理由です。

70年代の半ばからは、しだいに制



横浜美術館にて。背景作品は、「李禹煥 余白の芸術」展(9月17日～12月23日)に設置された新作《関係項一鉄の壁》(2005)。本展のためにつくられた全長18m、高さ3mの大作は、圧巻。石材は、茨城県真壁町産の御影石。今秋には、「もの派一再考」展(10月25日～12月18日 大阪・国立国際美術館)も開催される*]

リー・ウー・ファン 1936年韓国・慶尚南道生まれ。56年ソウル大学校美術大学中退、来日。61年日本大学文学部哲学科卒業。69年美術出版社芸術評論賞受賞。2001年世界文化賞絵画部門賞。主な著書に『新版・出会いを求めて』美術出版社、2000年)、『余白の芸術』(2000年)、『時の震え』(2004年、ともにみすず書房)など。現在、多摩美術大学教授。主な個展に67年サトウ画廊(東京)、70年田村画廊(東京)73、83年東京画廊(東京)、78年デュッセルドルフ市立美術館(ドイツ)、88年岐阜県美術館、93年神奈川県立近代美術館、94年韓国国立現代美術館(ソウル)96、2004年リッソン・ギャラリー(ロンドン)、97年ジュ・ド・ボーム国立ギャラリー(パリ)01年ボン市立美術館(ドイツ)、03年ホアム・アート・ギャラリーほか(ソウル)、04年フェルネ・ブランカ現代美術館(フランス)など。主なグループ展は、68年「韓国現代絵画展」(東京国立近代美術館)69年「現代美術の動向」(京都国立近代美術館)70年「現代美術の一断面」(東京国立近代美術館)71年パリ青年ビエンナーレ、77年ドクメンタ6(カッセル、ドイツ)、86年「前衛の日本」(ボンビドゥ・センター(パリ))87年「もの派とポストもの派」(西武美術館、東京)90年「ミニマル・アート」(国立国際美術館、大阪)95年「アジアナ」(パラッツォ・ヴェンドラミン、ベニス)1970年「物質と知覚」(岐阜県美術館ほか)98年「サラエボ2000」(ルドヴィヒ近代美術館、ウィーン)2000年上海ビエンナーレ(中国)01年「センチュリー・シティ」(テート・モダン、ロンドン)04年「前未来の美術」(グルノーブル美術館、フランス)など。

作と発表の場をヨーロッパへと移した。日本やアジアとは別な他者に対して、普遍性を考える闘いのなかで、切り詰めた表現になってきたという。

《照応》(2005)は、工場仕上げでヨーロッパにしっかりと地塗りがされたキャンバス上に、大きな刷毛の筆跡によつて、余白を響かせる最近作の一点。「まず、絵がどこから生まれてくるか。点を一つ、ボンと

つける、つけることによつて周りの空気が響きあう場合もある。響きあいうつが、ある震動が生まれてきたときに絵画的な条件が成立する。」

「鐘をつく」と、鐘が鳴るとさううは言うけれど、じつは、周りの空間や空気がなければ、響きは生まれな。しかも聴く人もいない。そうした空間の響きあいをもつて、表現とし、それを「余白」という。ある種の山水画のように、描き残した部分を余白という考えは、僕にはない。これは、東洋に限らずヨーロッパのいろいろな作品についても、説明できることです。」

ほの暗い室内から、庭の隅に錆びた鉄板と石の作品に日が当たっているのが見えた。付近の寺や遠い寺の鐘の音が、風によつて響きあうような幻聴がした。話が終わり、お茶を飲んで、丘の家の上を過ぎる白雲を仰ぎながら、坂道をくだった。

たかみ・あきひ「美術評論家」

5月17日、鎌倉二階堂の作家アトリエと9月16日、横浜美術館にて取材